

映像を読み書きするちから

映像制作をつうじた学びのステップ

せんだいメディアテーク学校連携事業報告書



せんだいメディアテーク
sendai mediatheque

はじめに

視点を残し、伝えるための
「道具としての映像」を経験する。
映像を自ら理解し、選びとるちからを育む。

せんだいメディアテークでは、子どもたちの映像制作をつうじた学び「映像制作プログラム」を仙台市立木町通小学校、仙台市小学校教育研究会図画工作部会と連携し、2008年度から研究・実践してきました。

プログラムは、小学校の低中高学年それぞれに向けた3つのステップで構成されています。静止画、アニメーション、動画と段階的に映像制作を経験するもので、撮影の対象は、子どもたちの日常的なまなざしの先に発見できるよう設定しています。

学びの過程で子どもたちは、制作の楽しさ、伝え合うよろこびを感じながら、自分の思いや発見を記録し、伝えるための道具として、えんぴつのように映像を手にしていきます。いわば「映像のよみかき」を覚えることで、映像というメディアを理解し、選びとるちからを育むことを学びのねらいとしています。

この報告書では、先生方とともに子どもたちの学びの可能性を見つめ、取り組んできたプログラムを紹介するとともに、実践から得られた気づき、新たな展開について報告します。子どもたちと映像メディアをつなぐ学びの事例としてご参考となれば幸いです。

目次

はじめに	1
目次	2
映像制作プログラム	
ステップ①(低学年) いろいろコレクション	4
ステップ②(中学年) コマ撮りアニメーションをつくろう	6
ステップ③(高学年) 木町のたから	8
連携によるひろがり	
木町の3.11 児童による震災体験の記録活動	10
連携から育まれるもの	
仙台市立木町通小学校 教務主任 熊谷英之	12
仙台市小学校教育研究会図画工作部会 会長 横山美喜子	13
節点としてのメディアテーク	14
おわりに	15

せんだいメディアテークの学校連携

学校とメディアテーク、それぞれの専門性をあわせ、子どもたちの学びの可能性をひろげていくことを目的としています。

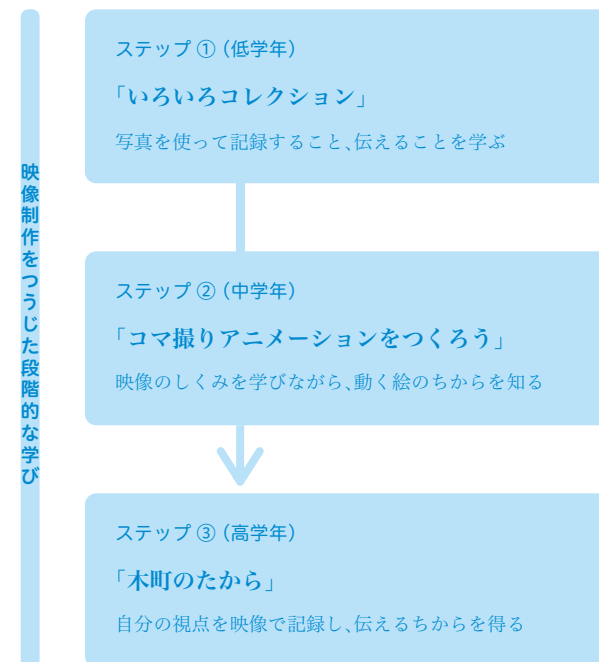
「映像制作プログラム」は、地域連携校でもある木町通小学校の低中学年で2008年度から取り組み、プログラム研究のほか、導入授業への講師派遣、機材の貸し出し、成果物(映像資料)の保存と公開などを行っています。

また仙台市小学校教育研究会図画工作部会と連携して、部会研修会や授業研究をつうじたプログラムの普及と研究を行っています。「コマ撮りアニメーション」は2009年度から市内の各希望校へ普及し、毎年、低学年から高学年まで1000名を超える子どもたちが製作を経験しています。現在は、新たな映像制作プログラムの普及を目指し研究が進められています。

映像制作プログラム*

小学校の低中学年それぞれに、写真(静止画)による記録、コマ撮りアニメーション製作、動画(映像)による記録を経験するプログラム。

映像制作の基礎を段階的に経験しながら、自分の視点を記録し、伝える/伝え合うことを学びます。



*プログラムで使用する機材

デジタルカメラ(動画撮影機能付き)、三脚、ウェブカメラ、ノートパソコン、テレビモニター、ハードディスク

*各プログラムで提案する時数は目安です。一部を宿題や放課後活動にしてもよいでしょう。総合学習、図画工作、社会などの科目での実践を想定しています。

*「木町のたから」は木町通小学校の卒業制作としても取り組まれています。

いろいろコレクション

写真を使って記録すること・伝えることを学ぶ

いつも何気なく見ている学校の景色をよく見つめ、「色」を見つけ出します。

発見を写真で記録し、発表します。

学びのねらい 写真を使って記録すること、伝えることを学ぶ
発見する楽しさを実感する

準備物 デジタルカメラ（ひとり1台）、テレビモニタ（観賞用）、紙と文具

時数の目安 45分 × 4コマ

題材との出会い

道具を知らせる。「カメラは自分の目。自分が見ている『いま』を残し伝える方法に写真がある」。

撮影のテーマを知らせる。「学校にはさまざまな色がかくれている。見つけて、写真であつめよう」。

＊カメラを手にする楽しさ、色のおもしろさ。子どもたちのワクワクする気持ちをふくらませていきます。

撮影のいろはを覚える

カメラはひとり1台（えんぴつがひとり1本であるように）。触れさせながら、持ち方、シャッター、ブレや逆光、どこから撮るかのおもしろさなどを知らせる。

撮影 発見を記録する

それぞれに撮影したい色をひとつ決めて、カメラを手には学校を自由にまわり、色を発見したら写真で記録する。

鑑賞 発見をみんなで味わう

ひとりずつ撮影した写真をモニタに映し、撮影の感想やお気に入りの写真を紹介する。

＊「青でも、いろんな青、それぞれの青がある」。色からひろがる発見の多様性を感じ、楽しむ場にします。

発表 発見を報告する

それぞれに自分が撮影した写真からお気に入りをお気に入りを選び、撮影した色、場所、氏名を書き添え、タイトルをつけて、壁新聞のように大きな紙に寄せたら、「いろいろコレクション」のできあがり。

＊廊下などに掲示して鑑賞の輪をひろげます。



高学年が撮影をサポート。彼らも経験した授業、しっかり見守ってくれます。



鑑賞では発見の気持ちを言葉にします。

先生の声

- ☑ 子どもたちは写真を撮るという行為だけにとらわれずに、自分なりの発見をするよろこびや達成感、互いの視点のおもしろさを感じることができている。
- ☑ 撮影のテーマは、子どもたちが日常の中で自ら発見できるものがよい。
- ☑ 上手に撮れたかではなく、いつもの世界をよく見る経験、発見の楽しさ、伝えるよろこびを実感できたかが大事。

コマ撮りアニメーションをつくろう

映像のしくみを学びながら、動く絵のちからを知る

身近にあるものを素材に物語を構想し、
グループで協力しながらコマ撮りアニメーションをつくります。

学びのねらい	映像のしくみを学びながら、動く絵のちからを知る 創作活動からうまれる発想のひろがりを実感する グループワークを学ぶ
準備物	ノートパソコン（製作ソフト）・ウェブカメラ・三脚（グループに1台）、 テレビモニタ（観賞用）、素材、紙と文具
時数の目安	45分 × 4コマ

題材との出会い

コマ撮りアニメーションをつくって見せながら、静止画が連続すると動いて見えるアニメーションのしくみ、絵が展開することで物語がうまれることを知らせる。

＊最初にパラパラマンガやマジックロールなどを見せ、アニメーションのしくみ「残像現象」を体感させてもよいでしょう。

撮影のいろはを覚える

グループごとに、ハサミや折り紙などを素材にして撮影練習を行う。

機材の操作とともに、フレームの中と外の世界、再生速度、素材の動き、画面の展開などの手法を知らせる。

構想 素材を観察しイメージをひろげる

身近にあるものから素材を選ぶ。よく観察し、物語を構想して絵コンテを書く。

＊基本は、机の上（平面）を舞台に撮影する。素材は、文具、木の葉、野菜、てぶくろなど。

発展として、教室や廊下などの空間、身体の動き、光や影などを用いてもおもしろい。物語の構想のヒント（時間、魔法、誕生など）を与えてもよいでしょう。

撮影 イメージをかたちにする

絵コンテをもとにじっくりつくる。

＊撮影の合間に、グループごとに映像を見直し話し合う時間や、互いのグループの作品を見せ合う時間をつくります。新しい発想がうまれたり、創作意欲が高まるきっかけに。

鑑賞 がんばりやよさを分かち合う

モニタで作品を鑑賞。物語のイメージ、大変だったこと、工夫したことなども発表し合う。



撮影の役割は交替しながら、すべてを経験できるように

子どもたちの声

- ☑ 初めて自分たちでこういうものを作って、友だちのいいところがわかった。
- ☑ 図工で班になって作品を作るのはあまりないので、みんなで作るの楽しいなあと思った。
- ☑ テレビで見ていたアニメも、時間をかけて作っているんだと思った。
- ☑ ふつうに使ったりさわったりしている物が勝手に動いて、できたものを見るとふしぎだった。
- ☑ ほかのグループもいっしょうけんめいで、手がうつつたりもしていたけど、心がこもっていたのがつたわってきた。

先生の声

- ☑ 児童の生き生きと楽しむ様子に、指導する側も楽しく取り組めた。
- ☑ 指導者の言葉がけで作品の出来上がりがかなり変わる。指導の難しさも感じた。
- ☑ 鑑賞会では互いの作品のよいところ、発想の違いを認め合う活動ができ、学級行動や言語活動などの学びにつなげられると感じた。
- ☑ 図工を苦手としている児童がはじめて「先生、楽しい！」と言ってくれた。

木町のたから

自分の視点を映像で記録し、伝えるちからを得る

「大人になった自分に伝えたい、いまの自分の大切なこと」を
1分の映像に残し、伝えます。

学びのねらい	自分の視点を映像で記録し、伝えるちからを得る 題材を通して地域（社会）と自分の関わりを見つめる 鑑賞から互いの個性やよさを知る
準備物	デジタルカメラ・三脚（ひとり1台）、テレビモニタ（観賞用）、紙と文具
時数の目安	45分 × 6コマ

題材との出会い

創世記の映画や記録映像のいち場面を見せ、気づいたことを話し合いながら、作り手の意図や工夫を考えさせる。

＊映像で記録し伝えることの意味をとらえさせながら、自分なら何をどのように映像で伝えるか、思い描くきっかけを与えます。

撮影のいろはを覚える

カメラと三脚をひとり1台ずつ持ち、2人1組で撮影し合いながら、機材の操作、アップとルーズ、カット割りなどの撮影技法、音があることでの印象の違い、肖像権などについて知らせる。

構想 伝えたいことを見い出す

ひとりひとり、過ごしてきた地域との関わりを見つめながら、未来の自分に伝えたい、いまの自分の大切なこと「たから」を見つける。場面の展開や時間配分、伝えたいことを映像にするための工夫を考えながら絵コンテを書く。

＊映像のちからを活かし、言葉による説明に頼りすぎないように投げかけます。

撮影 伝えるための工夫

2、3人で組みになり、カメラマンと安全確認の役割を入れて、絵コンテの場面の流れに沿って撮影を行う。見る人に伝わる映像になっているか確認しながら、校内と現場でのリハーサル、本番撮影を行う。

＊タイトルや撮影者名も映像の中で紹介します。

鑑賞 個々の視点を発見する

ひとりひとりの作品をみんなで
一緒に鑑賞する。

＊作品を通して個々の視点に出会い、自分や互いを再発見する経験がうまれる場をつくります。



映像資料（DVD）はメディアテークの視聴覚教材ライブラリーで保存・公開しています。



「木町のたから」のいち場面

地域の駄菓子屋さんでの撮影風景

子どもたちの声

- ☑ いつもなんとなく見ている場所や友だちの存在がすこし違う目線で見えた。
- ☑ 自分の大事なことを映像でどう伝えたいのかむずかしかった。
- ☑ 今度はきっと大人になったら変わってしまうようなものを撮りたい。
- ☑ 自分もよく行く場所でも、いいなと思っていたものが違ってておもしろいと思った。

先生の声

- ☑ たった1分の映像だが、子どもたちは自分の本当の姿を見てもらえるうれしさがある。どうして好きなのか、作品中では言わない理由や説明は必要ないのかも。
- ☑ 映像を通して思いをやりとりしている。子ども同士の共感を感じる。
- ☑ 子どもたちが試行錯誤しながら、ひとつの形にまとめあげていく。「上手ではないけれど、自分らしい」ことが学びとして大事。

木町の3.11

児童による震災体験の記録活動

木町通小学校では、子どもたちが地域の震災体験を取材し、映像で記録し伝える「木町の3.11」が2013年度より行われています。

「震災を他人ごととしてとらえるのではなく、地続きの人々の体験や思いから大切なことを学びとり、次世代へと伝えていってほしい」。先生方の思いから始まった「木町の3.11」には、メディアテークとの映像制作プログラムの学びや、地域連携のつながりも活かされています。

「子どもたちが問いかけることで、
はじめてあらわれる思いや言葉がある。」

木町通小学校の学区地域は、震災による建物の崩壊などは比較的少なかったものの、ライフラインは止まり、学校も長らく避難所となりました。学校には震災後に県内外から転入してきた子どもも多く、子どもたちそれぞれに震災による影響や思いには差があります。

こうした背景の中で、先生の呼びかけに5、6年生の有志27名が集い、夏休みをかけて活動に取り組みました。最初にブレインストーミングを行い、子どもたちが自分の体験や見聞きしたことを出発点に、知りたいことへとイメージをひろげて、取材先や聞きたいことを決めていきました。

メディアテークのスタッフからは、「3がつ11にちをわすれないためにセンター（以下、「わすれん！」）*」の活動について紹介し、震災の記憶を記録し伝えていくことの意味や、話を聞く心がけなどを一緒に考えました。

取材先は、学校の先生、魚屋、菓子店、ガソリンスタンド、交番、郵便局、公民館、交通局など、いずれも子どもたちが日常生活や職場体験で交流のある方々に決まりました。グループに分かれて取材先を分担し、カメラを持って各所を訪問。震災当時のこと、復興までの歩み、現在のこと、子どもたちへのメッ



わすれん！の活動を紹介

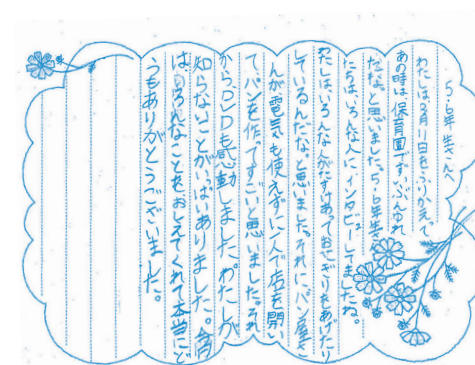


取材の様子(学校のお隣の交番にて)

セージ、さらにその場で感じたことも問いかけながら、インタビュー形式で取材を行いました。

取材活動を通して、「体験を未来に伝えていきたい、子どもたちにも伝えていってほしい」という地域の人々の思いも受け取った子どもたち。全校児童や地域の方々が集う発表会の場で、感じたこと、学んだことをメッセージに込め、インタビュー映像とともに伝えました。

「木町の3.11」活動は、その後も毎年、高学年の有志の子どもたちに受け継がれ、家族や復興支援に携わる人々へと取材先をひろげながら継続して取り組まれています。



発表を聞いた3年生から届いた手紙

* 3がつ11にちをわすれないためにセンター

せんだいメディアテークが2011年5月に開設した東日本大震災の市民協働アーカイブ。「木町の3.11」の映像資料は、取材先や学校のご協力を得て、わすれん！のアーカイブ資料としてライブラリーやウェブサイトで保存・公開しています。

→ <http://recorder311.smt.jp/>

連携から育まれるもの

仙台市立木町通小学校 教務主任 熊谷英之

「わぁ！ダメェ！」座ったまま突然、突っ伏す女の子。映像が流れると「ハハハハ」「わかるわかる！」という友達の声にだんだんと顔が上がってきて、最後は恥ずかしそうにほほえむ。6年生の卒業制作「木町のたから」の発表会で毎年見られる光景です。

子どもたちは6年生まで、教員を含めた大人や地域、そして仲間と関わり合いながら地域や学校で過ごしています。そこで、卒業に当たって地域や学校生活を見つめ直し、それまで関わった中から、大人になっても大切にしたい自分なりの「たから」を見つけることが、子どもたちが生きる上での礎になると考えます。

「たから」を見出し、伝えるために構想を練り、仲間と共に撮影し、1分間の映像として編集する。本校ではそんな活動にメディアテークの支援を受けながら数年間にわたり取り組んでいます。地域に育つ子ども、地域に関わる子ども、地域創生の一員。地域を担う子どもを育てる上でも、ふるさと教育の一環として「木町のたから」が有効な一つの手法であると考えています。

教育現場では、ICT活用による情報活用能力を高める必要性、国語では「伝え合う力」の育成が叫ばれています。「木町のたから」の活動では、自分の意図を伝えるための構成力、自分が大切にしているものを効果的に表現する力、さらに、それをまとめるためにグループの中で伝え合う力、相手の意図を受容しながら協力して活動する力が必要です。この「木町のたから」の活動を通して、現行学習指導要領で必要とされる「生きる力」を育成する言語活動が、随所にちりばめられていると感じています。

メディアテークは映像制作のノウハウを持っています。我々教員は、子どもたちを動かすノウハウを持っています。両者が連携を図ることによって、映像という制作物の作成を通して子どもたちに伝え合う力、表現力を高めていく可能性を秘めていると感じています。まだまだ課題はあって修正をかけていかなければなりません。が、両者でWIN&WINの関係を構築し、有意義な教育活動が子どもたちのために展開できるよう努めていきたいと思っています。

仙台市小学校教育研究会図画工作部会 会長

仙台市立南材木町小学校 校長

横山美喜子

毎年1月に開催される「仙台市小・中学校図画工作・美術合同展」の会場には、数台のパソコンとテレビモニターが置かれている。これは小学校で取り組んだコマ撮りアニメーションの作品を視聴するためのもので、例年、来場者が興味深そうに鑑賞している様子が見られる。

子どもたちにとって映像は生まれた時から常に身近にあった存在であり、コマ撮りアニメーションの製作にはほとんどの子どもがとても意欲的に取り組んでいる。現実の世界では動かないものを画面の中で動かす、現実には起こりえないことを画面の中で起こす。撮りためた画像を初めて連続して映写した時、子どもたちからは必ず歓声上がるのである。そこに映像という表現のよさや可能性を感じている。

図画工作部会がせんだいメディアテークと連携し、コマ撮りアニメーションの製作機材の貸し出しや夏季研修の講師の派遣をお願いすることになって7年目となり、毎年アニメーションに取り組む学校も増えてきた。2014年度も、約1200名の児童がアニメーション作りを楽しんでいる。これは全国的に見ても、仙台市だけの取組ではないだろうか。また現在はコマ撮りアニメーションだけではなく、メディアテークと連携して自分なりの感性で動画を切り取る授業に取り組んでいる学校もある。2016年度に仙台で開催される第69回全国造形教育研究大会では、これらの成果を全国に向けて発信したいと考えている。



図画工作部会の夏季研修会の様子。コマ撮りアニメーション製作を体験しながら、学びのねらいやプロセスを共有します。

節点としてのメディアテーク

連携の先に描くのは、子どもたちのこれからに学びの経験が活かされること。

社会との関わりの中で、さまざまな課題に向き合うとき、メディアテークはそのための道具(手法)を得る場所、仲間と出会う場所、活動の拠点であり、ともに考え、サポートする存在でありたいと考えています。

市民協働とアーカイブ

せんだいメディアテークでは市民や団体と協働し、地域社会のテーマについて対話・表現・記録・発表する活動を日常的に行っています。

また、地域の歴史、文化活動、震災の記憶などを記録・収集し、デジタルメディアに変換して蓄積しています。これら記録資料は、DVDや印刷物、ウェブサイトなどの媒体で公開するほか、市民との活動の場で活用されています。*

* 民話の記録「声の図書室」、街並みと暮らしの記憶「どこコレ」、市民による番組制作「ことりTV」、目や耳の不自由な方への情報発信「バリアフリーデザイン」、震災、てつがく、農業、障害など社会のさまざまなテーマについて市民が対話する場「考えるテーブル」、東日本大震災の市民協働アーカイブ「3がつ11にちをわすれないためにセンター(わすれん!)」など



市民の対話の場「考えるテーブル」



DVDはメディアテークの映像音響ライブラリー、視聴覚教材ライブラリーで貸し出しを行っています。(撮影:小岩 勉)



わすれん！ウェブサイトには映像をはじめ、写真、音声、テキストなどの記録資料を掲載

おわりに

手に道具を渡し、きみがつくるんだよ、きみが見つけるんだよ、と知らせたときの子どもたちのワクワクした表情。鑑賞を通して、それぞれの思いが伝わり合うときの、照れながらも誇らしげな様子。作品からは個々のまなざしがまっすぐに伝わってきて、見る大人たちをときにハッとさせます。

メディアテークが持つ映像文化や美術の特性は、明確なかたちや答えが必ずしもあるものではなく、学校教育の場に持ち込む難しさもあります。その中で、先生方とともに可能性を探り、試行錯誤を繰り返しながら、映像制作プログラムはつくられてきました。

木町通小学校との取り組みでは、先生方の子どもたちを見つめるまなざしを通して、学校連携の意義についても何度も気づきを得ながら進んでいくことができました。8年にわたる連携からは「木町の3.11」への展開が生まれ、近年は社会科見学や職場体験など、よりひろく連携を図る機会も増えています。

ともにプログラムの普及、研究に取り組んできた仙台市小学校教育研究会図画工作部会は、子どもたちの創造性、表現力、個のちからを引き出すスペシャリスト集団。熱い思いを持つ先生方はいつも心強い存在です。

映像制作による学びが子どもたちひとりひとりの「生きるちから」を育む学びへと向かうことができたのは、こうした先生方との歩みがあったからこそと改めて実感されます。

これからも地域のつながり、連携の育みを活かし、いつも気軽に声をかけてもらえるような身近な存在でありたいと願うとともに、先生方と力をあわせながら、子どもたちの学びの可能性をひらいていけたらと思います。

映像を読み書きするちから

映像制作をつうじた学びのステップ

せんだいメディアテーク学校連携事業報告書

編集・発行 せんだいメディアテーク

〒980-0821 仙台市青葉区春日町2-1

TEL 022-713-3171 / FAX 022-713-4482

WEB <http://www.smt.jp/> / MAIL office@smt.city.sendai.jp

デザイン cajil(カジル)

印刷・製本 坂部印刷(株)

発行日 2015年12月31日

©2015 sendai mediatheque All Rights Reserved.

本書記事・写真・イラストの無断転載を禁じます

